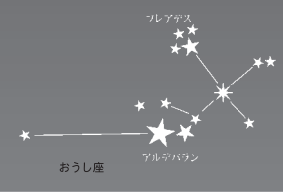
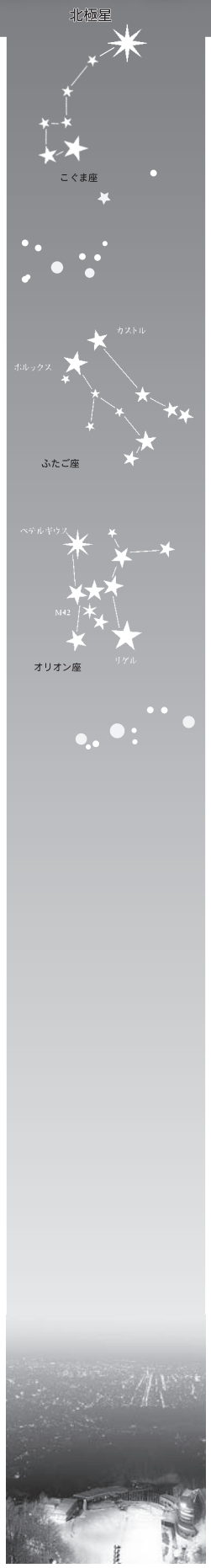


ー医師会長エッセイー

ポラリスを仰ぐ北の大地から



新型コロナウイルスに思う

美幌医師会 会長　田中　克彦

６月27日現在、北海道の新型コロナウイルス感染者は1,216名で、全国で４番目に多い状況です。５月31日まで緊急事態の措置がとられましたが、それ以降も感染者は０にはならず、６月下旬からは再び感染者数が徐々に増加し、第３波発生も危惧されています。道内では多数のクラスターが発生し、その中には医療機関や介護施設の発生も多く見られています。更なる新型コロナウイルス感染者の増加に備え、医療体制の強化が叫ばれている現在、入院施設の確保は最重要課題となります。

そんな中、今は集まることが困難で進展はありませんが、我々は地域医療構想調整会議で、病床区分変更の回復期病床の確保に頭を悩ませていました。今回のコロナ禍が、我々にとって未曾有の経験で、対応の想定が困難であったのは事実です。しかし、現在の地域医療構想下での病床区分では、重症者が入院する超急性期病床はもとより、感染症病床の確保も不十分であることが露呈しました。今後、病床区分について再考する必要がありそうです。また、道内では前述のとおり介護施設での感染者も多く、高齢者が多数を占めました。

マスコミは命の選別について問題提起をしています。一旦感染してしまうとご家族は面会ができなくなるため、感染してから本人の意向を確認することは困難です。今こそACP（人生会議）が重要になります。本人・ご家族・介護スタッフ・かかりつけ医などが事前に「もしものこと」について話し合いを行い、今後の医療・介護を円滑に行う一助とする必要があるでしょう。

高齢化社会に入っている日本が進めてきた政策が、特に医療に関しては全く余裕がなく、コロナ禍のような非常事態での脆弱さを白日の下に晒す結果になりました。既成概念に捉われず新たな医療体制について考え直す必要がありそうです。

根室金刀比羅神社例大祭

根室市外三郡医師会 会長　杉木　博幸

毎年８月９日から11日まで開催される根室金刀比羅神社例大祭は、新型コロナウイルス感染症のため、今年は残念ながら中止となった。中止となるのは太平洋戦争以来のことである。根室市民だけでなく大勢の根室出身者が帰省し大いに盛り上がる、根室人自慢のお祭りであるだけに、意気消沈している人も多い。

根室金刀比羅神社は文化３年（1806年）に船の安全航海のために高田屋嘉兵衛により創祀され、以来人々の崇敬を集め、精神的な拠り所となっている。その例大祭は長い歴史を持つ伝統行事で「こんぴらさんの夏祭り」とも呼ばれ、夏の風物詩として市民に親しまれている。記録によると明治21年に初の神輿渡御が行われ、大正９年には４祭典区が設けられ、全市民挙げてのお祭りとなった。札幌市の北海道神宮例祭、江差町の江差姥神大神宮渡御祭とともに、北海道三大祭りのひとつとされている。お祭りの３日間は歩行者天国となる根室市中心部の緑町通りに、200を超す露店が立ち並び、縁日を楽しむ多くの人で賑わう。２日目、３日目の「市内巡幸」では、奴行列を先頭に重さ約1.5トンもの大御神輿が約120人の若者により奉担され、勇ましい掛け声とともに根室市内を練り歩く。この神社行列の後を笛太鼓や金棒をはじめ、手古舞や子供神輿と共に４つの祭典区から繰り出される趣向を凝らした山車が続き、約１キロにも連なる華やかな大行列が見どころである。９日・10日の夕刻からは４祭典区総出演による「音と力の競演」が熱演され、大勢の観客を魅了する。

私は祭典区の一員として法被を着て練り歩き、祭典区委員長も経験させていただいた。医師が祭りに参加するのは私が初めてとのこと。また神社の総代を拝命し行列に参加している。新型コロナが一段落し、お祭りが再開された際には、是非お立ち寄りいただきたい。